

大自然の偉力に對する人間業の信念と老博士の

懷 舊 談

工 學 博 士 廣 井 勇

昭和三年の本誌の初刊に何にか工事に關する美談か何か寄稿せよとの申込を受けたれど、自分の如き者に美談などのあるべき筈もなく、余人の事ならば本にも載せられてあり、自分が語るようななきと思ひたるも、切角年甫に所望のことなれば、何にも美談でもなく、又た自慢話にもならぬことなれど、少し計り昔の苦心談でも試みよう。

× × × ×

自分は曾て北海道廳に在職して小樽築港に従事したる者にて、同工事は自分等が時の長官、北垣國道氏に施設の必要を説き、同氏も見る處あつて計畫せられたるものなるが、當時築港なるものは聊か事珍らしく、先に野蒜に於て失敗し、亦た輕微ながら横濱港に在りても蹉跌を來したる後にて、政府に於ては非常に危ぶみて容易に之を受容れなかつた處、長官及び有志者の百方盡力したる結果により井上内務大臣の視察する所となり、又た古市技監の調査するありて二百餘萬圓の豫算は議會を通過し、明治三十年に起工の運びに至つたのである。

斯の如く重大視せられたる工事の監督を一任せられたる自分の責任は甚だ輕くなかつた當時經驗に乏しき自分の苦心は

一應尋常の

事でなく、漸やく工事の進捗を見るに及ぶや三十二年十二月に至り防波堤の延長約二百間に達したる頃一日遽に暴風の襲ふ處となり忽ち怒濤澎湃して起り、二三時間の間に何にもかも破壊して洗ひ去られ、残りたるものは出來上つた防波堤と、其上に在りたる積疊機のみとなり、是等も益々加はる風浪に耐へ難き状態に至り、多少の應急作業の外施すに術なく、激浪の爲すが儘に委し、傍觀する中に

日は暮れ、何にも見へなくなり、唯だ遠雷の如き波撃の音を聞くのみであつた。

是に於て

自分は萬事窮し

居室に戻り、思案に暮れ心中頗る穩かならなかつた、若し既成の工事にして全然破壊せらるゝに至らば、何の面目あつて其顛末を報告して豫算の追加を請ふべきやを苦慮し、此時ばかりは眞に當惑を極め、事是に至らば斷然一命を以て自分が不明の致せるを謝するの外なしと思ひ定むるや、心も靜まり、横臥して古來工事失敗の責任を一身に負ひたる人々の事杯を回顧し、自分も軀て其數に入らなければならぬものかと思ひ、只管天祐を祈る其中に何時しか終日の勞の爲め假睡するに至り夜半過ぎて目を覺し愈々時來れりかと思ひ附きたるごき、意外にも波音大に靜まり居り、海上稍々平穩に歸したる模様なりしにより、兎に角に現場に赴かんごし、外に出れば雪は降り居たるも、風は大に風ぎ、防波堤上に至れば打越す餘波のため其上を歩行するごきは得ざりしかご、其存在は之を認むるごきが出来其殺那の嬉しさは今に忘れ得ない、又た貴重なる積疊機も殘て居り、自分は其時

天を仰て神に感謝した

翌朝に至り被害の程度を検したるに、今一度の強き波撃を受けたらんには、堤は破壊せられ積疊機は墜落したるべき状態にありたるごき歴然として現はれ、其折自分の胸中には千萬無量の感が往來した、以來寒懷殆んご三十年間激浪の襲來を受けたるごき幾回なるやを知らざれごも、以上の經驗により得たる多大の教訓は堤をして今日に至らしめたるものである。